

ゲルマン人としてのイングランド人について

——アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教信仰文化研究の意義と指針

和田 忍

0. はじめに

「ゲルマン人」の存在は、ヨーロッパにおいて古代から中世の時代へ移行する重要な観点のひとつである¹。しかし、ゲルマン人について、その全体像を特定することは、難しい。長らく多くの研究者たちがこの点について論じてきたが、今に至っても明確な解決には至っていない。ゲルマン人という用語は、紀元1世紀にタキトゥス（Cornelius Tacitus, c.56-c.120）より書かれた『ゲルマーニア』（*Germania*）で語られることに由来する。この著述のなかで、ローマ帝国の領土以北の地に住み着いていたゲルマン人は、数多くの部族から構成されていることが示されている²。『ゲルマーニア』に登場するゲルマン人たちを言語的観点から見てみると、彼らの言語であるゲルマン語派（Germanic branch）は、北ゲルマン語群（Northern Germanic languages）、東ゲルマン語群（Eastern Germanic languages）、西ゲルマン語群（Western Germanic languages）という3つの語群に分けられる³。こうした状況から、ヨーロッパ大陸の北西部地域において同系統の言葉を使用しながら多岐にわたる部族を総称してゲルマン人とする概念は、タキトゥスの言及と重なる。タキトゥスによる『ゲルマーニア』での記述以降、ヨーロッパ北西部地域に居住していた人々を称してゲルマン人とするようになった。しかし、言語的観点からの分類状況でもわかるように、ゲルマン人は様々な部族に分かれていて、各々で独自の文化を有して生活していた。本論では、ゲルマン人は多くの種族で構成されて、多彩な文化が存在するということを前提として、そのうち、「ヨーロッパ大陸のゲルマン人居地域からブリテン島に渡ってイングランド地域に移住して、後にイングランド人となった人々」を考察の対象として定める⁴。こ

のイングランド人は、ゲルマン人たちの本拠であるヨーロッパ大陸から離れることによって、地理的な環境において本土のゲルマン人たちと異なる独自の道を歩むことになった。地理的環境に加えて、彼らの社会状況による要素が作用することで、アングロ・サクソン期を通じてイングランド人は独自の文化を作り上げた。そして、この文化は中世以降ヨーロッパの中心的存在として進展するのである。こうして出来上がったアングロ・サクソン期のイングランド人文化には、民族的ルーツであるゲルマン人に由来する要素が大きく関わっている。そこで、ここではイングランド人におけるゲルマン人由来の要素についての考察を深めたい。

アングロ・サクソン期のイングランド人におけるゲルマン人由来の要素についての考察に入る前に、この時代のイングランド人のアイデンティティについて考えておきたい。イングランドにおける国家としてのアイデンティティの形成は、アングロ・サクソン期の民族的、政治的概念に基づいて、中世期から近代期にかけて固定化するというのが通説である⁵。そこで本論では、「アングロ・サクソン系民族」国家としてのアイデンティティ形成を考慮しているので、大陸から移住したゲルマン人たちによって国（民族の別組織）としての構成単位が確立する6世紀以降に基盤となる要素が出現し始めて、醸造されていくという前提で論を進める。

アングロ・サクソン期のイングランドにおけるアイデンティティの形成については、Harris（2001）によって論じられているので、彼の論考をもとに議論したい⁶。Harrisは、アルフレッド大王（Alfred the Great, 848/9-899）の時代である10世紀末には、ブリテン島のイングランド人は自民族の源泉であるゲルマン人として共通する記憶から湧き上が

る国家民族的アイデンティティを有していた、と示唆している⁷。大陸のゲルマン人たちを源とするイングランド人の興りについては、ビード (Bede, 672/3-735) によるラテン語文献である『イングランド人の教会史』(Historia ecclesiastica gentis Anglorum) のなかにその記述が存在する。アルフレッド大王は、その内容を古英語へ翻訳する際に、自身たちがアングル人、サクソン人といった大陸のゲルマン人に由来する、と述べるビードの記述を確認したうえで、イングランド人のアイデンティティについて再解釈している、とも Harris は述べている。ここでの再解釈について改めて考えると、ブリテン島に住み着いている人々に関して、ビードの記述では前時代的なキリスト教的視点に基づく単純なイングランド人に関する出自情報のみであった。それに対して、アルフレッド大王は、キリスト教という宗教的な観点から自国民を見ることによって、大陸的なキリスト教秩序とは異なる宗教民族的秩序に基づく人々であることを彼の翻訳を通じて示しているのである。つまり、アングロ・サクソン期のイングランドには、すでにローマ・カトリック教会のキリスト教的枠組みが存在するものの、そうした枠組みを超えたゲルマン人としての血統と信仰という基盤のうえにキリスト教 (とその理念) が浸透している状況であると解釈できる⁸。

改めて、アングロ・サクソン期のイングランドにおけるアイデンティティを考えてみると、以下の3つの要素が挙げられるだろう。それらは、(1) 地域行政的 (regional and administrative) 要素 (2) 教会組織的 (ecclesiastically organisational) 要素 (3) 民族的 (ethnic) 要素である。まず、最初の地域行政的要素については、地理的、行政的な単位で自身を他者と区別することであり、自身が何者かであることに対して、出身地による影響を大きく受けるが、特殊な事情がない限り、要素として理解しやすい。そして、次の教会組織的要素については、前段で扱ったキリスト教のローマ・カトリック教会組織に自身が加わることで形成される自集団を構成する意識をもたらす要素である。ゲルマン人たちはローマ・カトリック教会の組織力を政治的に利用し

て国家形成を進めていた様子が、ゲルマン人居住地域の各地で見られる。それがやがて、ゲルマン人自身自身のアイデンティティ形成にも大きく関係してくる。イングランド人よりもヨーロッパ大陸本土におけるゲルマン人のほうが、比較的早い段階でローマ・カトリック教会による影響を強く受けている。

そして、3つ目の要素にある民族的要素は、ゲルマン人としての民族的要素である。先述したように、ゲルマン人として共通意識を持つ要素として、彼らの文化、特にその中心的存在というべき信仰であるゲルマン人由来の異教信仰 (Germanic paganism) を取り上げることがこの要素を理解するための肝となる。イングランド人はヨーロッパ大陸北部という出自の場所を離れたことで、大陸のゲルマン人たちとは異なる新たなアイデンティティを形成していった。彼らのアイデンティティの形成要素として、取り上げる民族的要素は、イングランド人として彼らの独自の捉え方によるものである。そこで、イングランド人のアイデンティティ形成を探るために、イングランド人としての他のゲルマン人とは異なる民族的要素を確認したい。その要素の中心となるものが、イングランドにおけるゲルマン人由来の異教信仰文化である。

1. アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教文化

1. 1. ブリテン島におけるイングランド人のアイデンティティ構成に至る状況

イングランドにおけるゲルマン人由来の異教信仰文化を考察するにあたって、まず、イングランド人の動きを見ていきたい。そこで、イングランド人の興りから近代に至るまでについて、彼らのアイデンティティ形成の観点から概略を述べる。5世紀になると大陸よりいくつかのゲルマン人部族がブリテン島へ渡来して、それまでのブリテン島居住者であったケルト語系のブリトン人 (Britons) を追いやった。そして、彼らは大陸由来のゲルマン人たちの社会文化の特色を引き継ぎながら、イングランド地域に部族ごとの王国を建てていった。ここでの状況からイングランド人としてのアイデンティティを考慮

すると、地域行政的要素と民族的要素という先の3つの要素のうち、ふたつが働いている。それゆえに、この段階ではまだイングランド人としてのアイデンティティがまだ確立するに至っていない。

ブリテン島のイングランド地域に大陸出身のゲルマン人たちが、彼らの部族を中心に王国を作り上げていった段階では、まだ古来の民族色が濃い社会状況であった。しかし、その後、彼らはラテン文化、とりわけキリスト教の影響を強く受けて、これまで維持していた大陸的なゲルマン人たちの文化的特徴を薄めていった。この結果、ブリテン島におけるイングランド人は、ヨーロッパのキリスト教社会文化に本格的に組み込まれていくことになる。こうして、残りひとつの要素である教会組織的要素が、イングランド人に加わって、アングロ・サクソン期のイングランドにおけるアイデンティティ形成が進んでいく。

さらにそのあとの時代を経て今日に至るまでに、イングランド人は様々な外的影響を受け続けた。それに加えて多様な人種を受け入れてきたことにより、近代そして現代のイングランド人のアイデンティティはさらに大きく変容している。このように現在のイングランド人のアイデンティティはより複雑化しているが、「ゲルマン人由来の特性」を構成する要素として、イングランド人のアイデンティティの根底を成す民族的要素を考慮することは重要である。イングランドが中世以降の時代も発展し続けてきた理由として、中世初期にゲルマン人社会から地理的に分断されているブリテン島に住み着いた人々が、のちにヨーロッパとしての環境に合わせた社会を築き上げて、文化的基盤としていたことが挙げられる。彼らの社会文化は、ゲルマン人としての源泉的な文化概念から枝分かれして、ブリテン島のイングランド地域で新たに作り出された。そして、このような状況のなかでイングランド人としての独特なアイデンティティを醸造するに至った。言い換えれば、イングランド人は、アングロ・サクソン期にブリテン島イングランド地域でゲルマン人由来の特性を応用して、彼らの社会文化を構成したのち、キリスト教文化の影響を受けて、それを利用するこ

とで中世以降のヨーロッパ世界で進化、発展したととらえることができる。

1.2. 民族的要素における考察の意義について ——イングランドとアイスランドにおける異教信仰に対する人々の意識

アングロ・サクソン期のイングランド人におけるゲルマン人由来の民族的要素は、彼らの異教（Anglo-Saxon paganism）文化と密接にかかわっている。そこでここでは、アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教文化に関する論点を示す。まずは、ゲルマン人地域における異教信仰の特徴に触れる。

イングランドを含むヨーロッパ北西部におけるゲルマン人居住地域では、特有の異教信仰（Germanic pagan belief）が存在していた。この地域における異教信仰に関しては、北欧神話に登場するような神々それ自体について、また、そうした神々に対する人々の信仰についての痕跡が、文献史料や考古学的遺物に多く残されている。これらの異教の神々に関する内容や神々への信仰の様子の観点から、アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教信仰の特徴は、周辺他地域の状況と比較考察することで明らかになってきている⁹。

イングランド人は、ヨーロッパ大陸の西ゲルマン語群に属する言語を話す人々にその源を質することができる。西ゲルマン語群の言語を話す人々には、大陸にて勢力を拡大したフランク人のような有力なゲルマン人部族も含まれる。イングランドへ渡った人々は、大陸に残った西ゲルマン語群の人々のうちで大きな勢力を保ったフランク人と分岐したため、のちの発展状況が異なっている。こうした分化の状況は、同じくゲルマン人でノルウェーやデン（デンマーク）といった地域から移民としてアイスランドへ渡った北ゲルマン語群の人々の行動、そしてその後の彼らの展開状況と並行の関係になっている。イングランドとアイスランドの両地域は、ともに自国語による叙述史料を豊富に揃えている。しかし、ヨーロッパ西部の大半の地域の文献は自国語ではなく、ラテン語によって置き換えられていたため、イングランドやアイスランドにおける状況は中世期に

において非常に珍しい事態であった。イングランドとアイスランドの両地域はともに彼らのルーツが大陸のゲルマン人たちにある。そのため、これらの地域の叙述史料に彼らのルーツに関する情報が含まれている¹⁰。しかし、民族的ルーツの記述におけるスタンスは、これらふたつの地域で異なっている。アイスランドは、西暦 1000 年にキリスト教を国教として採用して以来、キリスト教国に改宗された。キリスト教化された後においても、アイスランドでは北ゲルマン語群の人々によってもたらされた異教信仰について、この地域の言語である古アイスランド語によって文献史料として残されている。それを確認してみると、アイスランド人である彼ら自身のルーツが大陸由来のゲルマン人たちにあることや、ゲルマン人たちによる古来の異教信仰、特に異教の神々のことが確かに記述されている¹¹。以上のことから、アイスランド人は、新たに得た北方の土地で、先祖のゲルマン人による異教的慣習に基づく社会文化を作り上げたことが理解できる。一方、イングランドは、ゲルマン人由来の居住地域において比較的早期から国内がキリスト教化した影響によって、イングランド人のルーツである異教信仰に基づく社会文化を認めず、排除する傾向が見られる。特に、10 世紀以降のアングロ・サクソン後期における法律や条文、説教散文といった文献史料のなかで、異教信仰の禁止に関する記述が散見される¹²。アイスランドとイングランドがともにキリスト教国となってからは、どちらの国でもそれまで慣行となっていた異教信仰が行われなくなったようである¹³。このように、同じ島国であり、ゲルマン人移住者によって形成されたイングランドとアイスランドであるが、異教信仰に対するスタンスは異なっていることが確認できる。

1. 3. ゲルマン人社会における異教の神々について——概論と論点

古来ゲルマン人の信仰していた神々について、イングランドおよびアイスランドにおける異教信仰文化の観点からその様子を探っていく。北ゲルマン語群地域であるアイスランドと西ゲルマン語群地域の

イングランドにおいて、名称の違いはあるが、共通する異教神信仰が存在する。異教神として様々な神々が存在したなかで、オーディン (Óðinn)、トール (Þórr)、フレイ (Freyr) が主要三神としてとりわけ崇められていた。このことは、三者の神々に関する遺物としての偶像の残存状況からも理解できる¹⁴。イングランドにおいてはこれらの神々のうち、オーディンに関する記述が大半を占める。その重要性を鑑みて、以下ではオーディンに焦点を絞って、ゲルマン人由来の異教神信仰の状況について確認する¹⁵。

北欧神話では、オーディンが神々の集合体であるアース神族 (Æsir) と呼ばれる集合体における主神に位置付けられている。オーディンは主神という立場に加えて、万物の神であり、魔術や詩作にも優れているといわれている。オーディンを神として崇拝するのは、主に王族や首長、呪術師、詩人であったことから、オーディンは支配階級の人々における守護神であった¹⁶。王族、首長、呪術師、詩人といった人々はことばを操る、すなわち書物を読み書きすることのできる人々であった。そのため、北欧神話における他の神々の記述に比べて、オーディンを扱う分量が比較的多い。イングランドにおける異教の神々との関連性を見るためには、オーディンについて記述されている文献史料を精査したうえで、イングランド人によるオーディンへの対応、意識についての分析、そして議論が重要となる。また、他ゲルマン人居住地域の状況と比較考察をすることで、イングランドに特徴的な異教信仰文化についての有力な手掛かりが得られる¹⁷。

オーディンが支配階級に重宝されていた例として、アングロ・サクソン王国群における系譜についての記述が挙げられる。アングロ・サクソン期のイングランド人は王家の系譜について述べた文献史料を残している¹⁸。この系譜のなかに組み込まれるのがオーディン (イングランドではウォーデン、Woden) であり、アングロ・サクソン期の前半におけるイングランド人は、古来ゲルマン人の異教神を彼ら自身の血統に組み込むことで、自身に対する政治的権威を高める要素として利用した。当時の各

王国を束ねる国王たちは、オーディンを自らの系譜に加えることで、イングランド地域における自身の王権の正当性を主張したと考えられる。しかし、唐澤（2011）は、イングランドではウォーデンの名前を異教神ではなく、単なる名前のひとつとして特別視する名前ではなかったと述べている¹⁹。唐澤によると、王家の権威付けや正当性の主張に対してウォーデンが利用されていたのは9世紀末までであり、この頃になるとキリスト教的世界観がかなり普及したうえに政治事情も相まって、ウォーデンよりさらに以前に遡ったゲルマン人由来の神々を経由しながら旧約聖書の世界に基づいた家系が作られていったと述べている²⁰。確かにイングランドにおけるオーディンは人間化されていった様子が見受けられるのだが、それはアングロ・サクソン期の後期における状況が生み出したものであると考えられる。アングロ・サクソン王国群が建国され始めた6世紀頃の時期においては、オーディンはひとりの英雄であり、また人間であると認識する前の段階であったはずであるので、オーディンに対する神格化の意識がまだ残っていたと推測される。アングロ・サクソン期の国王たちの系譜を示した文献史料のなかに現れる異教に関連する名前は、オーディンに限られている。

オーディンという名称は、アングロ・サクソン期の前期と後期で、その扱われ方に変化が見られる。アングロ・サクソン後期におけるアルフリッチ（Ælfric, c.950-c.1010）による「異教の神々について」（De falsis diis）の文献史料のなかで、オーディンは地元語である（古）英語における水曜日の名前の由来として登場している²¹。オーディンに関する記述について確認すると、アルフリッチはキリスト教聖職者であることからキリスト教に立脚して、異教信仰に対して批判的な態度を示している²²。アングロ・サクソン後期におけるオーディンを示す記述は、前期の時代と違って、キリスト教が根付いたあとのイングランドの社会背景を鑑みなくてはならない。国家形成が進んで、ヨーロッパにおいてもイングランドの立場が認められるようになると、アングロ・サクソン王国群は異教文化に基づくオーディン

の名を利用して政治的立場を強める必要はなくなった。むしろ、安定した王国を脅かすヴァイキングへの対応を余儀なくされたが、その人々はゲルマン人由来の異教文化を保つ人々であった。すでにキリスト教のもとに国家社会が整っていたアングロ・サクソン王国群にとって、彼らと根源の文化が同じであるゲルマン人民族のヴァイキングは、自身のアイデンティティを問うのに利用できる存在であった。そこで、アングロ・サクソン後期には、ゲルマン人由来の異教信仰の文化について記述された文献史料がキリスト教の教義に反しない範囲で残されているのである。このように、異教信仰に求める民族的要素に対する考え方が変化している様子をオーディンの用語が使用されている記述から見ることができる。

1. 4. 異教信仰と社会体制の関係について——9世紀から12世紀におけるアイスランドの事例から

アイスランドでは、北ゲルマン語群地域であるノルウェーから移民を迎え入れて以来、ゲルマン人の社会構造に基づいて、異教信仰が発展、形成されていった。この状況は、北欧神話として文献史料に多く書き残されている。ここでは、アングロ・サクソン期におけるイングランドの社会状況との比較対象として、神話の形成に関連する時代に焦点を当てて、アイスランドの社会状況について述べる。ここで扱う時代とは、アイスランド島への植民が始まる9世紀初期からアイスランドが独立を失う13世紀中葉までで、いわゆる自由国時代と呼ばれる時代である²³。以下で自由国時代におけるアイスランドの社会状況を示しつつ、彼らが作り上げた信仰との関係性を見ていく²⁴。

アイスランドへの植民は、870年頃にノルウェー西部出身のヴァイキングの人々を中心に行われた²⁵。ノルウェーでは人口増加から経済的利益を求める動きと、ノルウェー国王であるハラルド美髪王（Haraldr hinn hárfagri, c.850-933）による中央集権支配を嫌う動きが相まって、アイスランド島へのノルウェー人による大規模な移住が行われた。この時期である870年から930年頃は、植民の時代と

も呼ばれている。この植民の時代に行われた移住は、個人的な行動が集積した状況で平和的に行われたため、当時のスカンジナビアに存在していた古い社会形態がアイスランドに持ち込まれて再現されたといわれている。

アイスランドへの移住は任意であったため、移住先での土地所有は家族経営で行う小規模なものであった。こうしてアイスランドで形成された小規模農場は、経済的、政治的に独立していた。また、アイスランドにおける農場は個々が孤立して点在していたため、村落共同体のようなものは形成されなかった。しかし、隣接する農場同士による土地の境界線に関する紛争の解決、結婚による同盟、権力や名誉の誇示、相続の清算、問題解決などのための法的共同体として、集会（シング、þing）が組織された²⁶。集会は、法的な共同体であるとともに宗教的な面が強かった。集会の主催者はゴジ（goði）と呼ばれたが、この名称は古ノルド語における「神」（goð）に関連している。そのことからこの語に信仰的な関連性があったことは明らかである²⁷。こうした集会の制度は、彼らの先祖である大陸におけるゲルマン人諸部族において普遍的な制度であった。そして、アイスランドでもこの制度が基本となって、集会の制度が整えられた²⁸。

930年頃までのアイスランドにおける植民活動の結果、人々の居住可能な地区への植民が完了したことで、全島で一致する法や集会制度が必要となった。そこで、島を4つの地区に分けて、各地区で司法制度機能を確認させたうえで、全島会議の仕組みが出来上がった。それが、アルシング（Alþing）である²⁹。アルシングは40人ほどのゴジによって運営されていた。また、一般の農民は自身の所属する地区における特定のゴジに従っていて、ゴジに自身の利益を代弁してもらっていた³⁰。アルシングは単なる司法機関であって、執行機関でなかったことが、当時のアイスランド社会に国家が不在であったといわれる所以である。執行においては、当事者の実力に委ねられるため、アイスランドの人々は個々に様々な同盟を結んで、事態に対応した。同盟に関しては特に地縁に基づく、党派的なものが多かった

といわれており、それもアイスランドの全島的な国家統治を遅らせた原因である。こうした社会状況が、自力救済慣行として紛争や暴力への対処方法のひとつであるフェーデ（Fehde）と呼ばれる血の復讐（blóðhefnd）を生んだ³¹。

10世紀末よりアイスランド島における統合への流れが進んでいく。各地のゴジに実質的な政治権力が分散していたが、1000年には、全島にまたがる抗争を回避するために、ノルウェー王のオーラヴル・トリッグヴァソン（Óláfr Tryggvason, c.963-1000）の介入によって、アイスランド人はキリスト教への改宗を受け入れた。1056年と1106年には島の南北にキリスト教司教座が置かれて、神学を中心に学問が開花するが、こうした流れが、後のアイスランド・サガをはじめとする大量の写本作成につながっていく。1200年頃までには、アイスランド島における権力の集中化が進んで、13世紀に入ると限られた豪族間での抗争が激化したことで内乱状態になった。そして、積極的に周辺地域への進出を図っていたノルウェー王ホーコン4世（Håkon IV Håkonsson, 1204-63）によって、1262年から1264年にかけて貢税と臣従の誓約を取り交わしたことで、アイスランドの人々はノルウェーの支配を受けることとなった。アイスランド人による自国の立法権、司法権は大きく削減され、それに伴いアルシングの役割も形骸的なものとなった。

自由国時代のアイスランドの社会状況を見たとえ、異教信仰とそれに基づく文化に関する内容を考慮すると、おおそキリスト教改宗前後の時期までに以下の3つの論点が挙げられる。最初の論点は、アイスランドにてスカンジナビアで続いていた古い社会形態が再現されていたことである。アイスランド島への移住民が行われていた当時、指導者による移住の決断、および入植地点の選定においては宗教的要素が機能していたと考えられる。そうした宗教的要素を示す例として、アイスランドへ持ち込まれた神像から始まり、家長権を示す高座の柱や亡くなった家長の棺にその役割が移っていた様子がみられる³²。前者の柱においては、家という空間を一つの小宇宙と見立てて、その中心に据えられ

ている柱を祭っているが、その概念が北欧神話における世界樹ユグドラシル (Yggdrasill) につながり、また大陸においてはザクセン人のイズミンズール (Irmisul) といった神木に異教信仰文化と関連性が見受けられる³³。

ふたつ目の論点として、集会組織について触れる。大陸におけるゲルマン人部族の集会といえば、大自然に接して、神霊への崇拜の念を抱きながら共通の祭儀や供犠を行う場であった³⁴。戸外の自然にあふれた場所での集会を通じて、各部族は宗教的な団体としてそれぞれまとまっていた。のちに崇敬の集会で会議が開かれるようになるが、それはその地域の属する人々が参集する義務を負うようになった。こうして集会は、犠牲を神霊に捧げることと同時に、自身の部族内に関する会議を兼ねるものとなった³⁵。アイスランドにおいては、集会の中心的存在であるゴジが元来主導者として、政治的だけでなく宗教的な役割も果たしていた。アイスランド全島でキリスト教への改宗を受け入れたアルシングでの場面においても、アイスランドで行われた異教に基づく慣習をすぐに廃止しない方向で妥協とするなど、異教信仰に影響を受けている様子が見られる。

最後の論点として、血の復讐を挙げる。血の復讐に関しては、ヨーロッパにおいて、中央権力構造が発展していない地域には古くから見られた行為であるが、アイスランドを含むスカンジナビアでは、紛争は個人や家族の責任において処理されるのが一般的であった。時には正当な報復行為として血の復讐が行われて、それによって一族郎党が壊滅することもあった。アイスランド・サガにおける文学群では、こうした確執の被害と解消がテーマとして描かれる作品が少なくない。そして、これはキリスト教と対比した異教文化の名残として捉えられている。最たる例として、『ニャールのサガ』(Njáls saga) を取り上げる。『ニャールのサガ』は 13 世紀に書かれたものであるが、960 年から 1020 年というキリスト教への改宗前後の時期の内容となっている³⁶。主人公のニャール自身早くにキリスト教への改宗を行ったとされるが、異教文化に基づく復讐の概念を捨てていない様子からアイスランドにおける異教文

化を探ることができる。

2. アングロ・サクソン期のイングランド人における異教関連の研究史について

2.1. 異教文化の研究史について——概論

アングロ・サクソン期のイングランド人における異教に関する問題については、学識の高まった現代以降に様々な観点から一層論じられてきた。このテーマが注目されたのは、文学的考察を行った Stanley (1975) が端緒といえる。この Stanley の論考は、古英語文学等の文献史料を用いて、アングロ・サクソン期におけるイングランド人の異教文化の研究をまとめたものである³⁷。Stanley の研究成果を契機として、以降関連研究が活発化した。そして、歴史考古学的な見地からは、Wilson (1992) が異教研究の幅を広げて、のちに学際的研究の増大と発展がもたらされた。以下にて、本論に関連するアングロ・サクソン期のイングランド人における異教をテーマとした先行研究について簡潔に紹介する。そのうえで、アングロ・サクソン期の異教研究に関する議論の意義を確認する³⁸。

2.2. 文学分野における研究史について

アングロ・サクソン期のイングランド人における異教についての文学的研究は、ブリテン島にて古英語やラテン語で書かれた文学作品を利用して、細々ではあるが近代以前から脈々と続いていた。前述の Stanley (1975) から始まった文学作品をもとにした異教文化についての研究は、調査対象となるアングロ・サクソン期のイングランド人によるものを多種多様に扱うことによって、今日に至っても新たな分析考察が続いている³⁹。本論に則した内容に限って近年の研究傾向をみると、アングロ・サクソン期のイングランドにおける通俗的な異教信仰についての問題に対する研究が挙げられる。この問題は、Niles (1991) で示された論考から発展した。この論考では、アングロ・サクソン期のイングランド人における「異教」(paganism) の定義や、大陸の異教信仰に関係する神々とイングランドにおけるそれとの関係性、サットン・フー (Sutton Hoo) 遺跡

での考古学調査による見解など、当時のイングランドにおける異教に関連する基本情報を提示している。こうした基本情報のほかに、通俗的信仰(popular beliefs)に関する言及も含まれていて、通則的な観点からのアングロ・サクソン期におけるイングランド人による異教信仰の受容についての考察は、当時の異教の実態を理解するためには非常に意義深い。通俗的な内容については、上記で述べた文学的な古英語詩よりも、平信徒も対象に含まれる説教や医学書といった文献史料から考察できる部分が大きいだろう。ゆえに最近では後者の文献史料の分析が多くみられるようになってきた。特に、アングロ・サクソン後期の通俗的信仰について、その様子を示す説教や医学書等の文献史料などを扱って分析をした研究が増加の傾向にある⁴⁰。それゆえにこれまで積み重ねられた研究成果をもとに、アングロ・サクソン期を通じて異教と当時のイングランド人との関係性を改めて問い直して、再評価する必要があるだろう。

2. 3. 歴史考古学分野における研究史について

前段でアングロ・サクソン期における古英語文学を利用したイングランドでの異教文化についての研究傾向を確認した。ブリテン島へ渡来してきた当時のゲルマン人たちは、まだ文字を持っていなかったために自身の文化を叙述文書にて伝達することができなかった。しかし、その当時の彼らの文化こそがイングランドにおける異教文化の原点である。ブリテン島における異教文化の色濃い時代の文化に関して、当時の地元の人々による文献史料が存在しないことは残念である。そのため、ブリテン島における文献史料、特に地元語である古英語の文献史料における考察には、現存している7世紀頃以降の文献史料が用いられるのが通例である⁴¹。そして、アングロ・サクソン期の異教の問題に深く踏み込むためには、ゲルマン人としてブリテン島へ渡来した当時以降の人々に関する情報であるラテン語で示された歴史叙述史料を活用することが重要となる。

今日における通説的なイングランド人の歴史や文化については、16世紀からその概念が構成、発展していった。16世紀当初は、宗教思想、17世紀か

ら18世紀にかけては政治思想の材料として、その後は様々な分野に対してイングランドにおけるアングロ・サクソン主義(Anglo-Saxonism)が形成されていた⁴²。イングランドに渡来したゲルマン人たちに基づく異教については、先のように当時の彼らによって作成された文献史料がないことから、彼らの考古学的遺物やキリスト教聖職者である後世の写字生が書き残した文献史料からの裏付けに拠らなければ、その内容はわからない。

20世紀後半になると、徐々に考古学と歴史叙述史料とを利用したアングロ・サクソン期のイングランド人についての研究が盛んになった。そして、歴史的観点からのイングランドにおける異教研究を切り開いたのは、先述したWilson(1992)での論考である⁴³。Wilsonはこの研究成果を示す前に、考古学考察をもとにした著作を数多く世に送り出している。考古学研究は古くからの伝統があるが、アングロ・サクソン期の異教についての考察にもこの分野の研究が利用されるようになった⁴⁴。また、1970年代にはGelling(1978)による地名における研究成果が発表されたように、様々な関連テーマにおける研究成果によって情報量が増えていった⁴⁵。そして1990年代以降、これまで積み重ねられた様々な先行研究が総合されて、当時のイングランド人における異教問題に対応する複合的研究が現れ始めた⁴⁶。Wilson(1992)では、固有名詞と文献的証拠の検討から始まり、次いで考古学的記録、特に土葬埋葬の記録に議論を集中しているが、そのなかでも地名に関する章の議論が一定の評価を得ている⁴⁷。

Wilson(1992)の最後の議論の部分で、アングロ・サクソン期のブリテン島におけるキリスト教化が成功したことについて論じられている。ここでWilsonは、異教信仰は個人の信念ではなく、部族や王家のアイデンティティと結びついた「共同体における忠義」(corporate loyalty)の行為であったと述べている⁴⁸。そして、6世紀末以降のイングランドにおけるキリスト教布教そしてその信仰の定着が成功したのは、国王を中心とした指導者たちのキリスト教信仰への意向が反映されたことに基づい

ているとも述べている。さらに、キリスト教化の後に指導者による元来的な異教信仰への一時的な逆戻りといったことが発生しても、それはキリスト教にとっての弊害とはならなかった、とも Wilson は続けて主張している。この主張の理由として、アングロ・サクソン期のブリテン島における異教を主導する神官についての情報が実質的にないこと、そして、埋葬品による判定も難しいことを挙げている。ここでの理由については、新たな証拠が示され、その分析が進まない限りは説明が難しいと思われるものの、異教信仰とアングロ・サクソン期のイングランド人のアイデンティティとの関連性に触れているところに研究課題の所在が感じられる。

最近のアングロ・サクソン期のイングランド人における異教についての研究動向として、Hatton (2013) を取り上げることで先行研究の紹介を閉じたい。Hatton は古代のキリスト教以前の信仰から現代におけるネオ・ペイガニズム (Neo-Paganism) の動向に至るまで、そして、ブリテン島における民俗学についても幅広く精通している歴史学者である⁴⁹。Hatton はその冒頭部分で、宗教 (religion) は「宗教とは、体系に何らかの関係がある霊的な存在や影響力の存在を信じることや、人間がそれらに敬意を払う関係を築く必要性を信じることとして特徴づけられる。」と定義していることに注目したい⁵⁰。ある人々の集団が同じ方法で上記のことを実践すると、それは「ひとつの」宗教となるのである。ブリテン島では、ゲルマン人系のイングランド人による信仰以前に、ケルト人やローマ人の土着的信仰もあり、さらにはローマ・カトリック系キリスト教の影響と様々な宗教が存在していた。アングロ・サクソン期のイングランドにおいては、信仰においてキリスト教化の過渡期を経験していて、後期にはキリスト教が定着するといわれるものの、異教の存在が完全に消え去らない。ゲルマン人由来の異教について考慮すると、Hatton が述べるところの霊的な存在や影響力の存在についてはアングロ・サクソン前期でこそ、重要性を示す様子が垣間見られるが、後期になるとこうした傾向がなくなってくる。しかし、後期においてもその証拠が示される理由は、自

身民族がかつて信仰していた異教の文化があり、その上にキリスト教が加わって、新たなイングランドの文化を形成していることにあるのではないだろうか。イングランドにおける文化の根底にゲルマン人由来の信仰文化があることを確認するために、イングランドの異教信仰文化にはどのような特徴が見られるのかということについて、問い直すべき時期が来ていると思われる。

3. おわりに——以降の考察の指針について

以上で、アングロ・サクソン期のイングランド人における異教文化を対象にする研究の意義や関連文献史料、異教信仰文化を支える神々、そして異教文化と社会状況の関連性について、さらには、アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教信仰文化に関する研究史について述べた。この段では最後に以降の考察についての指針を示したい。

ゲルマン人に特有の異教の形態があることは古くから認知されていたものの、20 世紀までアングロ・サクソン期のイングランド人における異教については、民族における単なる特徴のひとつとしての位置づけにすぎないものであるという認識であった。そして、Anglo-Saxon paganism (「アングロ・サクソン期におけるイングランド人の異教」) の用語が使用されるようになってから、多様な文献史料および考古学資料の分析によってイングランドにおける異教の実態が徐々に解き明かされてきた。これまでに様々な論考が提示されてきたが、アングロ・サクソン期のイングランド人における異教、そして、それに伴う文化については、アングロ・サクソン期のイングランド人のアイデンティティを形成する要素として、文献史料や先行研究を改めて精査、考察することが必要と思われる。その際に注目したいことは、アングロ・サクソン期における異教信仰、およびその文化が、他のゲルマン人居住地域の人々のそれと異なり、どのような独自性があるのか、ということである。アングロ・サクソン期の間に、イングランド人はキリスト教への国家群による全体的 (全島の) な改宗に伴って、キリスト教世界の構成員となった。そのため、イングランド人の精神性は他の

大半のヨーロッパ諸地域と同様にキリスト教的精神に根付いたものなり、彼らはヨーロッパの人々と同等であるという認識がなされることも多い⁵¹。しかし、イングランド人は、ヨーロッパ他地域の人々とは異なる扱いをされることもあり、これはイングランド人における独自の社会文化が認められているからである⁵²。そこで、イングランド人における本質的な性質、いわば属性は、彼ら古来の異教的性質という要素から展開されたものと捉えて考察をする必要性がある。

アングロ・サクソン期のイングランド人における異教の問題に光を当てるためには、上記の仮説を立てたうえでの理論的な検証が求められる。改めて、イングランドにて作成された文献史料を中心に、当時のイングランド人の属性に関する諸問題についての考察を通じて、アングロ・サクソン期のイングランド人に関する異教信仰およびそれに基づく文化の独自性について論じていきたい。

【参考文献一覧】

- Aðalsteinsson, Jón Hnefill. *Under the cloak: A Pagan Ritual Turning Point in the Conversion of Iceland*. Reykjavík: Háskólaútgáfan Félagsvísindastofnun, 1999.
- Brown, Peter. *World of Late Antiquity*. London: Thames & Hudson Ltd, 1971.
- Carver, Martin, Alex Sanmark, and Sarah Semple. *Signals of Belief in Early England: Anglo-Saxon Paganism Revised*. Oxford: Oxbow Books, 2010.
- Crossley- Holland, Kevin. *The Norse Myths*. New York: Pantheon Books, 1980.
- Davis, Kathleen. "National Writing in the Ninth Century: A Reminder for Postcolonial Thinking about the Nation." *Journal of Medieval and Early Modern Studies*. 28. Durham, Duke University Press, 1998. 611-37.
- Foot, Sarah. "The Making of *Anglecynn*: English Identity before the Norman Conquest." *Transactions of the Royal Historical Society*. 6. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. 25-49.
- Frantzen, Allen. *Anglo-Saxon keywords*. Hoboken: Wiley, 2012.
- Gelling, Margaret. *Signposts to the Past. Place-Names and the History of England*. London: J.M. Dent & Son, 1978.
- Hamerow, Herena, David A. Hinton, and Sally Crawford. Eds. *The Oxford Handbook of Anglo-Saxon Archaeology*. Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Harris, Stephan J. "The Alfredian World History and Anglo-Saxon Identity." *Journal of English and Germanic Philology*. 100. 4. Champaign: University of Illinois Press, 2001. 482-510.
- Hirst, John. *The Shortest History of Europe*. London: Old Street Publishing, 2010.
- Hutton, Ronald. *The Pagan Religions of the Ancient British Isles: Their Nature and Legacy*. Oxford and Cambridge: Blackwell, 1991.
- . *Pagan Britain*. New Haven and London: Yale University Press, 2013.
- Íslenzk fornrit. Reykjavík: Hið Íslenska fornritafélag, 1933-. *『アイスランド人の書』は第1巻 (I: *Íslendingabók-Landnámabók*. 1968)、『キリスト教のサガ』は第15巻 (XV: *Biskupa sögur I*. 2003) に収録されている。
- Jesch, Judith. "The Norse Gods in England and the Isle of Man." *Myth, Legends, and Heroes: Essay on Old Norse and Old English Literature in honour of John McKinnell*. Ed. Daniel Anlezark. Toronto: University of Toronto Press, 2011. 11-21.
- Jolly, Karen Louise. *Popular Religion in the Late Saxon England*. Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1996.
- Karkov, Catherine E. Ed. *The Archaeology of Anglo-Saxon England: Basic Readings*. London and New York: Routledge, 1999.
- Lapidge, Michael et al. *The Blackwell Encyclopaedia*

- of Anglo-Saxon England*. Oxford: Blackwell, 1999.
- Leeds, E. Thurlow. *The Archaeology of the Anglo-Saxon Settlements*. Oxford: Oxford University Press, 1913.
- Meaney, Audrey. "Pagan English Sanctuaries, Place-Names and Hundred Meeting-Places." *Anglo-Saxon Studies in Archaeology and History*. 8. 1995. 29-42.
- Myres, J. N. L. *Anglo-Saxon pottery and the settlement of England*. Oxford: Oxford University Press, 1969.
- Niles, John D. "Pagan Survivals and popular belief." *The Cambridge Companion to Old English Literature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991. 126-41.
- North, Richard. *Heathen Gods in Old English Literature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Owen, Gale R. *Rites and Religions of the Anglo-Saxons*. New York: Barnes & Noble Books, 1981.
- Page, R. I. "Anglo-Saxon Paganism: The Evidence of Bede." *Pagans and Christians: The Interplay Between Christian Latin and Traditional Germanic Cultures in Early Medieval Europe*. Eds. T. L. A. Hofstra, J. R. Houwen, and A. A. MacDonald. Groningen: Egbert Forsten, 1995. 99-129.
- Smith, Anthony. *The Ethnic Origins of Nations*. Oxford: Blackwell, 1986.
- Stanley, E. G. *The Search for Anglo-Saxon Paganism*. Cambridge: D.S. Brewer, 1975.
- . *Imagining the Anglo-Saxon Past: The Search for Anglo-Saxon Paganism and Anglo-Saxon Trial by Jury*. Cambridge: D.S. Brewer, 2000.
- Stenton, F. M. "The Historical Bearing of Place-Name Studies: Anglo-Saxon Heathenism." *Transactions of the Royal Historical Society*. 23. 1941. 1-24.
- Sawyer, Birgit and Peter Sawyer. *Medieval Scandinavia: From Conversion to Reformation circa 800-1500*. Minneapolis and London: University of Minnesota Press, 1993.
- Wilson, David. Ed. *The Archaeology of Anglo-Saxon England*. Cambridge: Cambridge University Press, 1976.
- . *Anglo-Saxon Paganism*. London and New York: Routledge, 1992.
- . Ed. *The Northern World: The History and Heritage of Northern Europe AD 400-1100*. London: Thames and Hudson, 1980.
- Wood, Ian N. "Pagan Religions and Superstitions East of the Rhine from the Fifth to the Ninth Century." *After Empire: Towards an Ethnology of Europe's Barbarians*. Ed. G. Ausenda. Woodbridge: Boydell, 1995. 253-79.
- Wormald, Patrick. "Bede, Beowulf and the Conversion of the Anglo-Saxon Aristocracy." *Bede and Anglo-Saxon England: British Archaeological Reports*. British Series 46. Ed. R. T. Farrell. Oxford: Oxford University Press, 1978. 39-90.
- 有光秀行『中世ブリテン諸島史研究——ネイション意識の諸相——』（刀水書房、2013）
- ウェーバー、マックス『古ゲルマンの社会組織』世良晃志郎訳（創文社、1969）
- 唐澤一友「アングロ・サクソン・イングランドにおける Wōden/Óðinn」清水誠編『アイスランドの言語、神話、歴史：日本アイスランド学会 30 周年記念論文集』（麻生出版、2011）：177-214
- 熊野聰『北欧初期社会の構成』（滋賀大学経済学部研究叢書、1984）
- タキトウス『ゲルマーニア』泉井久之助訳註（岩波書店、1979）
- ダンネンバウアー、ハインリヒ『古ゲルマンの社会状態』石川操訳（創文社、1969）
- チャールズ＝エドワーズ、トマス編『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 2 ポスト・ローマ』

鶴島博和監修、常見信代監訳（慶應義塾大学出版、2010）

戸田善治、澤田典子「地中海世界における「古代」と「中世」——西洋史学と世界史教育のあいだ——」『千葉大学教育学部研究紀要』66.2（千葉大学教育学部、2018）：267-76

長友栄三郎『ゲルマンとローマ』（創文社、1976）
ハースト、ジョン『超約 ヨーロッパの歴史』福井憲彦監修、倉嶋雅人訳（東京書籍、2019）

ヒースマン姿子『ヴァイキングの考古学』（同成社、2000）

藤原健剛『古ゲルマンの社会状態に関する研究——Tacitus, Germania を中心として——』（日本図書刊行会、2015）

増田四郎『西洋中世世界の成立』（講談社、1996）
松本涼「中世アイスランド史と紛争・フェーズ研究」『福井県立大学論集』55（2021）：17-30

松波有編『英語史』（大修館書店、1986）
松本宣郎・前沢信行・河原温共編『文献解説 ヨーロッパの成立と発展』（南窓社、2007）

三浦弘万『ゲルマン経済・社会・文化の史的研究』（杉山書房、1981）

三浦弘万「ゲルマンの民会」『西洋古代史の諸問題：西洋史研究会共通論題 1977 年～2005 年』松本宣郎編（東北大学西洋史研究会、2008）：177-89

南川高志「ローマ帝国の「衰亡」とは何か」『西洋史学』234（日本西洋史学会、2009）：61-73

和田忍「アルフリッチのゲルマン的異教に対する態度——古英語説教「異教の神々について」を読み解く」『新たな異文化解釈』（松柏社、2013）：2-21

和田忍「アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教信仰の痕跡に関する一考察——ウェドモアの条約と第2クヌート法典における文書を中心に——」『人文研紀要』85（中央大学人文科学研究所、2016）：125-53

和田忍「アングロ・サクソン・イングランドにおけるゲルマン人的異教文化について」『中世英語英文学研究の多様性とその展望』菊池清明、岡

本広毅共編（春風社、2020）：172-91

注

- 1 ヨーロッパにおける「中世」とは、ルネサンスの時代に提唱された三時代区分法（古代・中世・近代）に基づく。そして、古代から中世への時代の移行については、ローマ帝国の衰亡についての議論から考察されるようになる。のちに Brown（1971）がローマ帝国の衰亡に関わらず、人々の心性や宗教の観点から古代末期を定めたことで、現在に至ってもさらなる議論が続いている。ローマ帝国の衰亡に関わる議論については、南川編（2009: 61-73）、戸田、澤田（2018: 267-73）を参照。また、古代から中世への移行については、以下の3つの要素が重要視されている。（1）ルネサンス期に関心の高まりを見せた古代ギリシア・ローマの人間、そして芸術の規範としての「古典古代（ギリシア・ローマ）」（classical antiquity）、（2）ローマ・カトリック教会を中心とする「キリスト教」（Christianity）、そして（3）ローマ帝国後のヨーロッパ世界をリードしていく「ゲルマン人」（Germanic people）の3つの要素である。上記の要素については、増田（1996）や Hirst（2010）[日本語訳として、ハースト、福井監修（2019）]などを参照。
- 2 具体的な部族については、『ゲルマーニア』「第2部 ゲルマーニアの諸族」の内容を参照。本論では、総称として複数形の「ゲルマン人たち」を用いて話の流れによって単数形と複数形を使い分けている。また、ゲルマン人民族の下位分類として、「部族」の用語を使用しているが、この用語については近年議論が絶えない。前時代的な民族分類としての「部族」という表現は本論では適切であると考えているため、引き続きこの用語を使用する。
- 3 松波（1986: 5-7）。ゲルマン語派は3つの語群に分かれるが、さらに下位区分に多くの言語が分類されている。この分類によると、イングランド人は西ゲルマン語群のことばを話す人々に属し

ている。

4 大陸のゲルマン人地域からブリテン島へ移動して、住み着いたアングロ・サクソン期における人々は「アングロ・サクソン人」(Anglo-Saxons)として称されることが通例となっている。それゆえに、この時代の人々について触れられる著書名にアングロ・サクソン人ということばを冠しているものも多い。しかし、当時のイングランド地域に居住している人々自身が、そして当時におけるイングランド以外の地域の人々も彼らに対してアングロ・サクソン人という呼称を利用していたわけではない。ブリテン島における文献史料では、古くはブリタニアにおける「サクソン人」や「アングル人」という呼称が利用されていた。そして11世紀になって「イングランド人」という用語が定着するようになる。そこで本論では、アングロ・サクソン期におけるイングランド地域に居住する人々として、この時代の後期から使用された「イングランド人」を便宜的に用いることで、ブリテン島に居住していたゲルマン人を論じることとする。

5 アングロ・サクソン期における個人のアイデンティティについては、文字情報が少ないことから、ほとんど窺い知れない。そのため、この時代におけるイングランドのアイデンティティといえ、初期の部族、家庭単位におけるつながりの意識から民族的概念へと展開して、さらに国家的概念へと発展してできた文化を考慮した議論が主流である。この点については、Frantzen (2012: 144) を参照。また、国家としてのアイデンティティを考える際に、エスニックな共同体とネイションとの相違を議論した Smith (1986) の論考を活用したい。それによると、ネイションやナショナリズムの発生は18世紀後半とみなしており、さらにナショナルな感情はヨーロッパ西部においては15世紀から16世紀までさかのぼると述べている。このように、Smith は、ネイションとは近代期の様々な改革革命の産物ということを明言しているが、ネイションの形成にそれ以前の時代における「エスニックな共同体」との関係性

について触れている。ここでいうエスニックな共同体については、古来の文化やアイデンティティの積み重ねの上に成り立つものであるという認識をしている。そして、こうした前時代的なアイデンティティや文化の構成要素として、神話、記憶、象徴、価値を挙げて、これらの状態を確認することの重要性を示している。ここでの議論については、Smith (1986) 序章および第1章を参照。また、Smith (1986) の翻訳書であるスミス、巢山、高城他訳 (1999) のあとがきにある用語の説明において、「歴史的な領土、共通の神話と記憶をもつ大衆、公けに認められた文化、統一された経済、構成員すべてに共通した権利と義務、これらを共有しかつ名前がある人間集団と規定される」(321) と示されているように、中世期のイングランド人のアイデンティティを構成する要素として、「共通の神話と記憶」に基づいてアングロ・サクソン期の異教が利用できるだろう。アングロ・サクソン期のネイションについては、有光 (2013) にて、ノルマン征服以降のブリテン諸島国家において「ネイション」意識のあらわれを見て、その諸相について議論している。そのなかで、ネイションの概念については、「国家を形成し、ないしは形成していた、あるいはそのような意図をもつかそうした記憶を共有する共同体」(3-4) と述べられている。アングロ・サクソン期においてネイションの概念を考慮するのは難しいところであるが、少なくともエスニックな(民族的な)共同体としての概念を考慮するのに異教文化はその要素の重要な役割を担うことができると断言してよい。

6 Harris (2001: 482-84)

7 Harris (2001) は、Foot (1996) および Davis (1998) の論考を援用して、この説を補強している。Harris (2001: 482)。また、国家における民族意識について、Harris は Smith (1986) にて扱われる「エスニックな共同体」を示す用語であるフランス語に基づく「エトニ」(ethnie) を利用して論じている。特に Smith (1986: 15) の記述では、「それ [エトニ] は、民族の守護者

が保存して、拡散して、次世代に伝える神話を定義する複合的概念のもとにまとまって組織された共同体を指す。」と述べられている。英語における 'ethnic' や 'ethnicity' という語彙の用例は比較的新しく、*Oxford English Dictionary* によると初出例が 17 世紀と遅いものの、どちらの語彙も第 1 義の意味として、異教、異教の迷信や異邦人、異教徒としての内容が示されている。また、これらの意味は廃れてしまった語意 (obsolete meaning) とされていることから、初出例より以前の中世期まではまだ異教に関連する内容を示す語として使用されていた可能性もある。'ethnic' と 'ethnicity' という語は、ギリシア語における *ἔθνος* (ethnos 「民族、国家」) から作られて、heathen の語源として誤認されることが多かった。そこから、hethnic ないし heathenic という混乱した語形もあり、これら同様の間違った語形として ethnic も捉えられていたようである。

- 8 Harris (2001: 483)。また、Smith によると、人間には血縁と集団に所属する傾向がみられることを示している。まさにアングロ・サクソン期のイングランドの人々は血縁や集団帰属意識として、大陸のゲルマン人の人々を意識していたと考えられる。イングランドにおけるアングロ・サクソン前期においては、例えば、ビードが自身の属する共同体の過去に関する記録を残したことにより、当時のイングランド人のあいだで伝説や知識が共有されたのである。この点については、Smith (1986: 37) も参照。
- 9 ゲルマン人由来の異教信仰について、イングランドとアイスランドをはじめとしたゲルマン語地域との比較考察について、例えば、Norse (1997) では、ヴァイキングの人々が襲来する以前とその後の時代のイングランドと当時のスカンジナビアにおける異教と神話について、比較を通じて興味深い議論を示している。
- 10 ブリテン島におけるイングランド人は西ゲルマン語群の人々で、アイスランド人はノルウェー、デンマークを起源とする北ゲルマン語群の人々であることから、言語上の差異が存在する。それに

伴って、社会文化の面でも異なっていることも当然ながら推定される。イングランドにおける異教信仰については、アングロ・サクソン期におけるキリスト教聖職者による文献史料による記載内容が、北欧神話に登場する神々との関係性が強いいため、比較考察ができる。そこで、イングランドの異教状況を理解する助けとして、アイスランドにおける状況もあわせて考慮する。ただし、北欧神話は 11 世紀以降に洗練された形で文献史料に現れるので、アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教の状況考察に応用するには、信頼できる考古学的証拠等によって推測を裏付ける必要がある。この点については、Lapidge et al. (1999: 351) を参照。

- 11 例えば、『アイスランド人の書』や『キリスト教のサガ』のなかの記述に彼らのルーツや異教信仰に関する内容が含まれている。*Íslenzk fornrit* (Reykjavík: Hið Íslenska fornritafélag, 1933-) に含まれる第 1 巻 (I: *Íslendingabók-Landnámabók*, 1968) に『アイスランド人の書』が、第 15 巻 (XV: *Biskupa sögur I*, 2003) に『キリスト教のサガ』が収録されている。
- 12 イングランドにおけるキリスト教への改宗の様子は、チャールズ・エドワーズ編 (2010: 132-82) などを参照。また、異教信仰に対するイングランドにおける対応については、和田 (2016) を参照。
- 13 キリスト教改宗期のアイスランドについては、Aðalsteinsson (1999) などを参照。
- 14 ヒースマン (2000: 190) によると、上記異教における三神のうち、逸話の一場面としての石碑に描かれるものを除いては、偶像のほとんどはトール関連のものである。
- 15 イングランドにおける考古学的資料の分析によると、事実上信仰の対象となっていた異教の神々はオーディンとその息子とされるトールに限られている。物的証拠からも、このふたりの神々についての知識、そしてそれらへの信仰が少なくともヴァイキング時代 (7 世紀から 10 世紀) のイングランドにおいても存続していたと考えられ

る。また、それは上記の神々に関連した物語ないし詩などの文学的に分析されることの多い文献史料にも残されている。以上のことを考慮して、ここでは、異教信仰を知るイングランド人にとって重要な役割を担うオーディンについて扱うことで異教神への信仰の実態を確認したい。あわせて Jesch (2011: 21) を参照。また、トールに関しては、和田 (2021: 176) を参照。

16 Crossley-Holland (1980: xvi)

17 これに関しては、和田 (2013: 9-14) を参照。

18 Sisam (1953: 287)

19 唐澤 (2011: 207) における結論に至るまでの議論を参照。

20 唐澤 (2011: 208)。このような経緯で、イングランドにおけるオーディンは「人間化」されたと論じている。さらに続く議論で、10 世紀末以降になると、王家の家系についての文献資料を除いてウォーデンについての言及がなくなり、それと同時にヴァイキングである異教徒のデーン人が信仰する神としての言及が増えていくことが述べられている。そして、この動きはイングランドを苦しめたヴァイキングを異教徒として捉える動きを反映したものであるとも述べている。

21 ローマ世界の異教神であるマーキュリー (Mercury) との比較のために提示されたとも思われる。

22 この問題については、アルフリッチによる説教に関する文献史料のほかに、当時の様子を示した法律関連の文献史料なども利用して精査する必要がある。

23 アイスランドへの植民以降、有力農民層の主導する集会を中心とした社会が形成されて、各地域に権力が分散していた。しかし、13 世紀までに権力の集中が進んで少数の豪族間で抗争が激化する。13 世紀半ばには、ノルウェーの王に貢税と臣従を誓約して、その支配下に入った。その後、宗主がデンマーク王に代わり、1918 年における自治獲得したのち 1944 年の完全独立までアイスランドはデンマークの支配下にあった。こうした歴史を背景として 19 世紀後半に起こった独立運

動のなかで、アイスランドの人々はこの時代 (930 年から 1262/64 年) のアイスランドがいかなる王の支配も受けていなかった時期を黄金時代として理想化して、「自由国」時代と呼んでいる。松本 (2021: 18) を参照。

24 この時代のアイスランドにおける社会構造については、熊野 (1984) の論考を利用して示したうえで、異教信仰文化との関連を考える。

25 アイスランドの建国については、ノルウェー西部を出身とするヴァイキングの人々を中心に、スコットランドの島々とアイルランドを経由してやってきたケルト人 (特に女性が多かったといわれる。) を交えた 870 年頃の定住に遡る。移住の記録に残っている最初の定住者は、867 年頃にアイスランド島に到達して、874 年に再び訪れて、今日首都となっているレイキャヴィークに居住を開始したインゴウルヴル・アルトナルソン (Ingólfr Arnarson, c.849-c.910) である。清水 (2009: 139) を参照。

26 ここでの集会は、民会とも呼ばれる。

27 古ノルド語における神の意味である *goð* は、北欧神話におけるアース神族の神々 (複数形も同形) を指すが、キリスト教の布教後になると異教の神として認知されるようになる。

28 大陸におけるゲルマン人の集会については、三浦 (2008: 186-87) を参照。

29 アイスランドにおける全体集会としてのアルシングの概念は、大陸のゲルマン人部族にあったものが利用されている。三浦 (2008: 179) には、スカンジナビアのセムノーネン (Semnonen) と呼ばれる部族によって春に開催された全体集会の例が挙げられている。

30 松本 (2021) によると、こうした一般農民はシングマン (*þingmaður*) と呼ばれる。

31 フェーデ (Deut.: Fehde, Eng.: feud) は、武力行使によって自身の財産、権限、名誉を維持し、拡大しようとする行為を指している。フェーデは中世ヨーロッパ社会において、他の不正な殺人や暴力とは区別されて、正当な報復行為と捉えられていた。松本 (2021: 18) を参照。

- 32 熊野(1984: 84)。高座の柱や課長の棺の存在から、住み着いた場所が地域宗教的な役割を果たして、さらには祖先・英雄崇拜にも結び付いたと考えられる。
- 33 ユグドラシルやイズミズールに関する議論はのちの論考で詳細する。
- 34 集会が政治的機能とともに宗教的機能を有していた状況は、大陸ゲルマン人居住地域からスカンジナビア地域にも引き継がれた。スカンジナビア地域では部族間の確執を減少させて、社会的混乱を避けるために使われる均衡構造が確立していった。アイスランドでは、スカンジナビア地域の集会システムを応用した形で集会(その最大規模のものがアルシングである。)が構成されている。スカンジナビア地域における初期の集会については、B. Sawyer and P. Sawyer (1993: 80-82)を参照。
- 35 三浦(2008: 181)。また、関連する文献史料として、『ゲルマーニア』第11章の内容も参照。
- 36 『ニャールのサガ』における血の復讐の場面を通じた分析については、熊野(1984: 151-70)を参照。
- 37 ここでのStanley (1975)の論考は、1960年代において*Notes and Query*に掲載された異教に関する複数の論をまとめたものである。また、後年に刊行されたStanley (2000)では、上記の内容に加えて、アングロ・サクソン期のイングランド人に関係する陪審員裁判の証拠からの考察を含めた新たな論が示されている。著書の前半部でStanleyは、異教研究の動向として、19世紀から20世紀初頭のドイツ人研究者たちや彼らに影響を受けたイギリス人批評家たちがアングロ・サクソン期のイングランド人における異教の概念を再建しようとする様子について触れている。彼以前に挙げられている異教に関係する論点について、Stanleyの言及を利用して簡潔に述べると、彼はイングランド人がゲルマン人の一派であることについて以下のような状況を前提として考察をしている。その状況とは、アングロ・サクソン期のイングランドには豊かな口承詩の伝統があった

が、聖職者の改竄によって取り返しのつかない損害を被ってしまったこと、そして、その結果として生まれたキリスト教詩には異教の問題を知る価値がほとんどなくなってしまったこと、である。Stanleyの議論では、先ほどの状況を考慮せずにアングロ・サクソン期の異教の問題を論じた過去の研究者、批評家たちに対して、その誤りや問題に対する態度について批判する論調が目立つ。そして、Stanleyは『ベオウルフ』(*Beowulf*)をはじめとする古英語文学を利用して、次の3点について言及している。ひとつは、キリスト教文化が古英語詩を意図的に破壊しようとしたという見解に対する批判について、次に、異教的な事柄を示す決定要因に迫るために特定の詩を使って解析できることについて、最後に現存する古英語詩に異教の神々と異教的な運命の概念が示されていることについて、というものである。Stanleyの挙げたこれら3つの論点は、現在に至ってもイングランドにおける異教的特徴を示す要素についての研究テーマとして活用されている。

- 38 日本におけるアングロ・サクソン期のイングランド研究史概略については、和田(2020: 177-78)を参照。
- 39 アングロ・サクソン期のイングランドにおける文学的文献史料に基づいた異教についての先行研究は、多岐にわたるテーマで展開されている。
- 40 ここではJolly (1996)を代表格の研究として挙げておく。
- 41 特に多様な文献史料が作成されるようになる10世紀以降の文献史料を用いた研究が多い。
- 42 Frantzen (2012: 11)の用語説明によると、アングロ・サクソン主義とは、アングロ・サクソン時代の文化が、それ以降の時代であるポスト・アングロ・サクソン期において社会的、知的、政治的といった目的のためにどのように利用されてきたか、また、映画やその他のメディアといった人々に人気のあるジャンルにおいて、アングロ・サクソン(人)がどのように表象されてきたかを研究するもの、と述べている。同様に用語解説をしているLapidge (1999: 36)もあわせて参照。

- 43 Wilson は考古学的考察をもとにアングロ・サクソン期におけるイングランド人についての研究を行っており、代表的な研究に Wilson (1971) および (1976) がある。同時期の考古学的論考には Owen (1981) も挙げられる。Owen は同著のなかで Wilson について言及しておらず、文学的考察の比重も大きいが、アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教についての基礎情報が含まれている。
- 44 20 世紀前半に埋葬地についての研究を行った Leeds (1913) や、同中葉における陶器の遺物を研究した Myres (1969) によってその基礎が固められた。
- 45 関連してアングロ・サクソン期のイングランドにおける考古学に関するガイドハンドブックも出版されるようになった。1999 年には、Basic Readings in Anglo-Saxon England (BRASE) によるアングロ・サクソン研究についての導入書 *The Archaeology of Anglo-Saxon England: Basic Readings* が、2011 年には関連する幅広い内容の情報が示されている *The Oxford Handbook of Anglo-Saxon Archaeology* が出版されている。
- 46 Stanley (1975) の論考以来、アングロ・サクソン期のイングランドにおけるキリスト教文化に関する研究の割合が少なくなっていくなかで、Wilson (1992) で異教文化の検討が行われた。そして、Meaney は当初、考古学資料から始まり、後に文献史料を用いた異教研究の業績がある。また、Meaney は *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England* (1999) にて *Paganism* の項を執筆している。Blair はアングロ・サクソン期のブリテン島におけるキリスト教宗教史に関する研究から異教問題も度々取り上げている。また、歴史全般にかけての研究書も多い。Blair は、*The Oxford Handbook of Anglo-Saxon Archaeology* (2011) でも *The Archaeology of Religion* の項を担当している。アングロ・サクソン時代のイングランド史全般および異教関連については、Stenton の研究成果も重要である。異教関連の代表的研究として Stenton (1941) を挙げておく。

上記の他にも、Carver et al. (2010)、Page (1991)、Wood (1995)、Wormald (1978) など、アングロ・サクソン期のイングランド人における異教関連研究が数多く挙げられるが、ここでは代表的な研究に絞って示した。さらに Hatton については、本編で触れる。

- 47 例えば、Wilson (1992) では、ふたつの古英語語彙 *weoh* と *hearg* について、前者は名前のある個人に関連があり、道端にある神社のようなものと考えられている語と述べられている。そして、後者 *hearg* はほぼ人里離れた高台にあり、それのためにある集団が特定の時期にのみ訪れる聖域と解釈されている語と区別している。この考察に対する彼の論は説得力があり、現在でもこの論が支持されている。地名以外の議論については、8 世紀までの文字史料による証拠や、ノーサンバランド (Northumberland) にあるイーヴァリング (Yeavering) や、ワーウィックシャー (Warwickshire) におけるブラックロー・ヒル (Blakelow Hill) の遺跡、墓地と墓の構造といった寺院と神社について、そして火葬、サットン・フーにおける埋葬についての考察がある。ただし、ここでは宗教や儀式に関する議論が少ない。埋葬における宗教的な内容についても、複数の埋葬、生き埋めにされる埋葬、遺体が伏せられている埋葬、断頭台の存在、墓のなかの木炭と焚き火、埋葬具の種類や関連性といったことに触れているが、その理由についてまでは述べられていない。
- 48 Wilson (1991: 174)
- 49 Hatton (2013) は、Hatton (1991) で示されたキリスト教化以前のブリテン島の信仰そして、そこでの人々が実践した慣習的行為についての研究を再構成したものである。その Hatton (2013) では、先史時代からキリスト教の到来までの異教時代全般に関して、ブリテン島に関係するドルイドや侵略の歴史に関してなど、主要な考古学的結論を批判的に検証している。アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教を研究テーマとしていた初期の考古学者や科学者の知識に対して、真実や正確な事実と思われるもの

に検証がなされていないという思考に基づいて、Hatton は様々な分野から示される仮定に疑問を投げ掛けている。また、様々な歴史的資料（史料）から出てくる結論は、どのようなものであっても、より多くの情報が示されれば、その後に変わる可能性があるという主張も彼の著書のなかで示されている。同書では、紀元前 6000 年から始めて、年代順にブリテン島での異教の状況について説明しており、前半部では、鉄器時代からの先史時代における人々の歴史を科学的に調査する難しさについて触れて、記念碑に関する神話について批判を加えている。それ以降では、ケルト人の宗教的慣習に関するわずかな記録や、ブリテン島へのローマ文化の導入、キリスト教の布教の様子、等に関して説明、そして批判をしている。その一例を挙げると、ローマ人時代以降の西ヨーロッパでは、識字の能力はキリスト教の修道士にのみ操ることのできる技術であったことから、『ケルズの書』（The Book of Kells）やその他の修道院で作成された写本における宗教的な影響は、神話の批判的な検討に含まれるべきことが示唆されている。

50 Hatton (2013: vii)

51 キリスト教とは異なる信仰として、アングロ・サクソン期におけるキリスト教聖職者たちによって「異教」および「異教徒」という用語が使用されるようになったが、近年になってこれらの用語を避けるアングロ・サクソン主義者もいる。しかし、当時のこうした信仰を示す用語として、異教のほかに適切な用語が見当たらない現状もあり、何よりも当時の人々によって名付けられた名称であるので、引き続き、異教としてゲルマン人由来の信仰を示すことに利用する。

52 イングランドは地域的にはヨーロッパの一部であるが、European ではなく、British であるとしての考えが様々な場面で見られる。